HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリャーク語における人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチング
Author(s)	呉人, 惠
Citation	北方言語研究, 8, 1-21
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68726
Type	departmental bulletin paper
File Information	01kurebito.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 8: 1-21（北方言語ネットワーク編，新潟大学人文学部，2018）

コリャーク語における人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチング*

呉 人 惠
（富山大学）

１．はじめに

本稿では，コリャーク語（Koryak：チュクチ・カムチャツカ語族）のコピュラ文を形成する 2 つの形式の使い分けについて考察を加える。従来のコリャーク語文法では，コピュラ文は，述語名詞の末尾に人称接辞が付加されコピュラ機能を果たすことによって形成されるとされてきた (Zhukova 1972)(1)。しかし，コピュラ文は，もうひとつの方法，すなわち，述語名詞が様態格 -u/-o/-nu/-no[1] を取り，副詞として，「～である」という意味の状態動詞 it や存在動詞 tva の補語となることによっても形成される (2)。

(1) inankalicitavəlʕ-eɣəm
teacher-1SG.S
「私は教師だ」

(2) inankalicitavəlʕ-u t-ə-k-it-ə-ŋ.
teacher-ESS 1SG.S-E-IPF-be-E-IPF
「私は教師だ」

本稿では，このような人称接辞によるコピュラ文と，様態格名詞＋動詞 it/tva によるコピュラ文の間に，どのような使い分けがあるのかを考察する。

これら 2 形式の使い分けを明らかにすることは，単にコピュラ文にとどまらず，コリャーク語の述語形式全体のデザインのしかたにかかわる意味を持つ可能性がある。ちなみに，Stassen (2003) は, 述語の意味クラスとして Event, Property, Class, Locational の 4 つを区別し，典型的に Event は動詞 (e.g. John is running.)，Property は形容詞 (e.g. John is clever.)，Class は名詞 (e.g. John is a student.)，Locational は副詞 (e.g. John is in the garden.) によって表わされるが，各意味クラスにおいて典型的でない品詞の乗り入れ，複数の品詞のスイッチング，融合などが見られることを類型論的に論じている。そこでは，コリャーク語と述語の表わし方についても共通点が多い同系のチュクチ語 (Chukchi) が取り上げられ，これら 4 つの意味クラスのうち, Event と Locational において典型的でない品詞の乗り入れがおこなわれ

* 本稿は，科学研究費基盤研究 (C)「『コリャーク語文法』完成に向けた調査研究―ヴォイス・節構造の諸相を中心に」（26370480，代表：呉人惠）の研究成果のひとつである。データは，Kurebito (ed.)(2014, 2016) ならびに平成 29 年 9 月 26 日～10 月 3 日までロシア連邦ハバロフスク市においておこなったコリャーク語の聞き取り調査によって得られたものである。調査には，Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏（1955 年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ，女性）にコンサルタントとして協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。また、本稿の執筆にあたって、貴重なご助言を下さったお二人の匿名査読者の方にも心よりお礼を申し上げたい。

[1] -u/-o は子音終わりの名詞語幹に，-nu/-no は母音終わりの名詞語幹につく。母音の違いは母音調和による（u は弱母音，o は強母音）。

ていると指摘している。具体的には，Event を表わす際，動詞の屈折体系に名詞的要素（格接辞や人称接辞）が侵入して純粋な動詞形式と共存したり，Locational が副詞的のみならず名詞的にも表わされることを指している（それぞれの具体例については第 4 節を参照）。

しかしながら，Property や Class がどのように表わされるのかについては言及されていない。Property については，伝統的に「性質形容詞 (kachestvennye prilagatel'nye)」 (Zhukova 1972:146) と呼ばれてきた形式と，同じ語幹から派生した動詞形式が共存し，属性叙述と事象叙述で使い分けられていることが明らかになっている（呉人 [2010], Kurebito [2018]）。本稿は，残る Class についても，人称接辞による表わし方と，様態格名詞＋it/tva による表わし方が共存していることを示すことで，コリャーク語が Event, Property, Class, Locational のすべての意味クラスにわたって，典型的な品詞と非典型的な品詞の間でスイッチングがみられる言語であるという特質を浮かび上がらせることも企図している。

本稿の構成は次のとおりである。まず，第 2 節ではコピュラ文で用いられる人称接辞や動詞の形態的・統語的特徴について記述する。そうしたうえで，第 3 節では，コピュラ文の 2 つのタイプについて，両者にはどのような使い分けがあるのかを論じる。第 4 節では，Event, Property, Locational にみられるスイッチングにも触れ，コリャーク語の述語のコード化のしかたが述語の類型論的研究に持つ意義を指摘し，「おわりに」とする。

ところで，チュクチ語については，Identity (e.g. He is a doctor.)，Equation (e.g. That man/John is my father.) などを表わす際に，上述の 2 つの方法があることが Dunn (1999) によって簡単に言及されている。そこでは，人称コピュラは「ゼロ・コピュラ (Zero-copula)」(Dunn 1999:317)，コピュラ動詞は，本稿同様に「コピュラ動詞 (Copula verb)」(Dunn 1999:312) とされている。このうち，「ゼロ・コピュラ」とは，一般的には，主語と述語名詞の文法関係が明示的に示されず，単に両者が並置されているような場合を言う（e.g. Он врач.「彼は医者だ」［ロシア語］）。したがって，人称接辞によって主語と述語名詞の関係が明示されるチュクチ語やコリャーク語の場合には「ゼロ・コピュラ」と呼ぶのは適切ではない。ちなみに，Stassen (2003:77) は，自立の人称代名詞のみならず，指示代名詞に由来し，コピュラ文の述語名詞につくこれらの形式を，'pronominal copulas', 'pro-copulas' と呼び[2]，ゼロ・コピュラとは区別している。広義には，コリャーク語もこれにあてはまるが，コリャーク語の場合には，指示代名詞ではなく人称代名詞由来の接辞がコピュラ機能を担っていることから，本稿では，より狭義に「人称コピュラ」と呼び，コピュラ動詞と対置させる。

また，Stassen (2003) では，第 3 節で後述するように，コリャーク語にみられるようなコピュラ文のスイッチングは，名詞—副詞のスイッチングであるとしている。しかしながら，コリャーク語では，Class が名詞的に表わされるか副詞的に表わされるかということだけでなく，文全体が人称コピュラにより名詞的に表わされるか，コピュラ動詞により動詞的に表わされるかが，述語形式全体の特徴を考えるうえでも重要になってくる。そこで，本稿では，人称コピュラとコピュラ動詞の対立に焦点をあてて考察を進めていく。

---

[2] ちなみに，Stassen (2003) は pro-copula が，北・中央アジア，アフロ・アジア，東インドネシア・マレーシアに集中的に分布していることを指摘している。北アジアのコリャーク語の周辺言語について，コピュラ文が単に pro-copula によって形成されるのか，あるいはそれ以外の方法も共存し，なんらかの使い分けをしているのかについては比較検討する余地がある。

なお，以下のコリャーク語の例は，特に断りがない限り，筆者の聞き取り調査ならびに Kurebito (ed.)(2014, 2016) から得られたものである。

２．人称コピュラとコピュラ動詞

本節では，人称コピュラとコピュラ動詞の形態的・統語的特徴について概観する。

２．１．人称コピュラ

人称コピュラとして用いられる人称接辞は，自立の人称代名詞が接尾辞化したものとみられる。ただし，3 人称だけは単数・双数・複数の数接尾辞が代わりに用いられ，人称コピュラの役割を担う。下表 1 では，比較のために人称接辞を左列に，自立の人称代名詞（絶対格形）を右列に示す。3 人称以外の人称接辞と人称代名詞は，形式的に明らかな類似を示すが，人称接辞は人称代名詞と異なり，母音調和による異形態を持ち[3]，他の形態素の母音の系列に同化する自立性の低い接辞であることがわかる。

［表１］人称接辞と人称代名詞

人称	数	人称接辞	人称代名詞
1	単	-iɣəm/-eɣəm/-jɣəm	ɣəmmo
	双	-muji/-moje	muji
	複	-muju/-mojo	muju
2	単	-ɣi/-ɣe/-jɣi/-jɣe	ɣəcci
	双	-tuji/-toje	tuji
	複	-tuju/-tojo	tuju
3	単	-Ø	ənno
	双	-t/-ti/-te	əcci
	複	-w/-wwi/-wwe	əccu

下の (3) では，名詞語幹 en’pici「父親」にこれらの人称接辞がついた例を示す。絶対格形と同形の 3 人称以外には，主語を表わす人称代名詞の出現は任意であるため，カッコに入れる。

(3)	1単主	(ɣəmmo)	en’pici-jɣəm.	「私は父親だ」
	1双主	(muji)	en’pici-muji.	「私達 2 人は父親だ」
	1複主	(muju)	en’pici-muju.	「私達は父親だ」
	2単主	(ɣəcci)	en’pici-jɣi.	「あなたは父親だ」
	2双主	(tuji)	en’pici-tuji.	「あなた達 2 人は父親だ」
	2複主	(tuju)	en’pici-muju.	「あなた達は父親だ」
	3単主	ənno	en’pic-Ø.	「彼は父親だ」
	3双主	əcci	en’pici-t.	「彼ら 2 人は父親だ」
	3 複主	əccu	en’pici-w.	「彼らは父親だ」

[3] 1 人称単数の -iɣəm/-eɣəm/-jɣəm という 3 つの異形態のうち，-jɣəm は母音調和によるものではなく，直前の語幹末尾が母音の場合に現れる。

その他，同様に人称コピュラの例を下にいくつかあげる[4]。

(4) ɣəmmo ʕataw jajola-jɣəm.
1SG.ABS just fox-1SG.S
「私はただのキツネだ」

(5) ɣəcci qajəkmiŋ-iɣi.
2SG.ABS boy-2SG.S
「お前は少年だ」

(6) muji a-jejol’-ke-cʕat-ə-lʕ-ə-moje.
1DU.ABS not-understand-not-VBL-E-PART-E-1DU.S
「私たち二人は分別のない者たちだ」

(7) ənno jeqqe-qun n-ə-mel-qin ʕujemtewilʕ-ə-n.
3SG.ABS very PRP-E-good-3SG man-E-3SG.S
「彼はとてもいい人だ」

(8) A: meki-Ø ɣənin nənnə-Ø ?
who-3SG.S your name-ABS.SG
「あなたの名前はなんですか？」
B: kitna-jɣəm.
Kitna-1SG.S
「私はキトナです」 (Zhukova 1972:136)

(9) meki-jɣi ɣəcci, miŋkeki-jɣi ɣəcci?
who-2SG.S 2SG.ABS where-2SG.S 2SG.ABS
「あなたは誰ですか，あなたはどこから来たのですか」

人称接辞は，また，接続する名詞と同格であることを表わす。その際，その名詞は文中の名詞項になる。(10)(11) は S が，(12)(13) では P が人称接辞を取っており，動詞の人称と一致している。

(10) ŋavətqat-pill’aq-muju camjaq mət-ko-ŋvo-la-ŋ əcco-k.
girl-DIM-1PL indeed 1PL.S-IPF-begin-PL-IPF clean.a.fish-INF
「私たち少女は，本当に魚をさばき始めている」

(11) qoja-ɣənnet-ə-lʕ-ə-mojo qonpəŋ ŋelvəlʕ-ə-k cejmək
reindeer-take.care.of-E-PART-E-1PL always reindeer.herd-E-LOC near

---

[4] ただし，コリャーク語は主要部と従属部の配列が自由なため，次のようにコピュラ文なのか，名詞句なのかが判別しがたい例も散見される。

ŋewjəcʕ-ə-t inet-kin n-ə-mel-qine-t.
husband.and.wife-E-ABS.DU so-REL-ABS.SG PRP-E-good-3-DU
「夫婦はとてもいい人たちだ／とてもいい夫婦」

mət-ko-tva-la-ŋ.
1PL.S-IPF-be-PL-IPF
「私たちトナカイ遊牧民は，いつもトナカイのそばにいる」

(12) unmək kalicit-ə-lʕ-ə-muju na-ko-n-vetat-aw-la-mək oɣorod-ə-k.
very.much study-E-PART-E-1PL INV-IPF-CAUS-work-CAUS-PL-1P field-E-LOC
「彼らは私たち生徒に畑で大いに働かせた」

(13) a-val'om-ke-cʕat-ə-lʕ-ə-tojo qin'wat kalaʕa-ta
not-listen-not-VBL-E-PART-E-2PL it.turned.out devil-INS (ERG)
na-penn'-ə-la-tək-Ø.
INV-attack-E-PL-2P-PF
「お前たち言うことを聞かないものたちを悪魔が襲ったのだ」

さらに，コリャーク語では通常，他動詞文において A は能格で現れるが，筆者の調査では，同格の場合に，A も S, P と同じ形式で現れる (14)(15) の例も得られた。このうち (15) は名詞が修飾節を伴って現れている例である。

(14) qoja-toktor-eɣəm t-ə-ku-melew-ŋ-ə-new qeccaj-ə-n
reindeer-doctor-1SG 1SG.A-E-IPF-treat.a.patient-IPF-E-3PL.P Qeccaj-E-POSS
qoja-w.
reindeer-ABS.PL
「獣医の私は，ケッチャイのトナカイの治療をしている」

(15) ʕamin a-palomtel-kəlʕ-ə-tojo inankalicitav-ə-lʕ-ə-n, tite=ŋən
well not-listen-not-E-2PL teach-E-PART-E-ABS.SG someday
ja-kəlɣelo-la-ɣətkə ən'ŋəʕan et-ɣiŋ-ə-n.
FUT-regret-PL-FUT.IPF in.this.way be-NML-E-ABS.SG
「先生の言うことを聞かないあなたたちは，いつかこのようにしているのを後悔するだろう」

2 人称接辞が付加される場合，呼称 (obrashenie)(Zhukova 1972:134)として用いられることもある (16)(17)(18)。

(16) tok, tumɣ-ə-tuju, omakat-ɣijŋ-ə-n ko-ŋvo-ŋ-Ø.
well friend-E-2PL gather.together-NML-E-ABS.SG IPF-begin-IPF-3SG.S.
「さあ，皆さん，会議が始まっていますよ」 (Zhukova 1972:137)

(17) pipiqəlŋ-iɣi, ɣəm-nan ewəncam t-ə-je-lʕu-ŋ-ə-n.
mouse-2SG 1SG-ERG at.any.rate 1SG.A-E-FUT-find-FUT-E-3SG.P
「ネズミよ，私はいずれにしてもそれを見つけるからな」 (Zhukova 1972:137)

(18) əccan-eɣe　ɣəmka-jtəŋ　ɣa-wan'avat-a.
Eccan-2SG　1SG-ALL　COM-talk-COM[5]
「エッチャンよ，私に電話しなさい」

ただし，通常は，(19) のように人称接辞が現れず，呼称の名詞（絶対格）のみで用いられることが多い。人称接辞が現れる場合には，「他でもないあなたを呼んでいるのだ」という強調の意味が込められるという[6]。

(19) əccan-Ø,　in'et　a-kanco-ka.
Eccan-ABS.SG　don't　not-smoke-not
「エッチャン，タバコを吸うな」

ところで，これらの人称接辞は，名詞に付加される以外に，性質形容詞によって表される属性叙述形式や非定形動詞である結果相においても用いられる。(20) は形容詞語幹 mejŋ「大きい」からなる属性叙述形式の例である。

(20)	1単主	(ɣəmmo)	n-ə-mejŋ-ə-jɣəm	「私は大きい」
	1双主	(muji)	n-ə-mejŋ-ə-muji	「私達 2 人は大きい」
	1複主	(muju)	n-ə-mejŋ-ə-muju	「私達は大きい」
	2単主	(ɣəcci)	n-ə-mejŋ-ə-jɣe	「あなたは大きい」
	2双主	(tuji)	n-ə-mejŋ-ə-tuji	「あなた達 2 人は大きい」
	2複主	(tuju)	n-ə-mejŋ-ə-muju	「あなた達は大きい」
	3単主	(ənno)	n-ə-mejəŋ-qin-Ø	「彼／彼女は大きい」
	3双主	(əcci)	n-ə-mejəŋ-qine-t	「彼ら 2 人は大きい」
	3複主	(əccu)	n-ə-mejəŋ-qine-w	「彼らは大きい」

ちなみに，属性叙述形式がこのように述語名詞同様の人称接辞を取ることから，Bogoras (1922:776) は 'Predicative form of nominalized verb'，Stassen (2003:559) は，n- を 'nominalizing prefix' としている。

一方，結果相は，動詞語幹が名詞化を経ずに共同格接周辞 (ɣe-/ɣa-...-te/-ta/-e/-a) の前半部分 ɣe-/ɣa- に接尾して形成される。その際も，S あるいは P の人称をこれらの人称接辞が標示する。(21) は左列が自動詞 lq「行く」，右列が他動詞 jkəpl「殴る」の結果相の例である。S と P を表わす人称代名詞は義務的ではないため，スペースの関係上，省略する。

---

[5] コリャーク語では，このように動詞の裸語幹に共同格接周辞 (ɣe-/ɣa-...-te/-ta/-e/-a) が接続して命令の意味を表わすことがある。共同格接辞（前半部分）はまた，(21) で見るように動詞の結果相を表わす際にも用いられる。

[6] 一方，Dunn (1999) によれば，チュクチ語では人称接辞が付加された形式は，呼称としては用いられない。

(21)

＜自動詞＞		＜他動詞＞	
ɣe-lq-iɣəm	「私は行った」	ɣa-jkəpl-eɣəm	「私を殴った」
ɣe-lq-ə-muji	「私達 2 人は行った」	ɣa-jkəpl-ə-moje	「私達 2 人を殴った」
ɣe-lq-ə-muju	「私達は行った」	ɣa-jkəpl-ə-mojo	「私達を殴った」
ɣe-lq-iɣi	「あなたは行った」	ɣa-jkəpl-eɣe	「あなたを殴った」
ɣe-lq-ə-tuji	「あなた達 2 人は行った」	ɣa-jkəpl-ə-toje	「あなた達 2 人を殴った」
ɣe-lq-ə-tuju	「あなた達は行った」	ɣa-jkəpl-ə-tuju	「あなた達を殴った」
ɣe-lq-ə-lin	「彼／彼女は行った」	ɣa-jkəpl-ə-len	「彼／彼女を殴った」
ɣe-lq-ə-linet	「彼ら 2 人は行った」	ɣa-jkəpl-ə-linet	「彼ら 2 人を殴った」
ɣe-lq-ə-linew	「彼らは行った」	ɣa-jkəpl-ə-lenaw	「彼らを殴った」

さらに, 定形の他動詞の屈折形式において, 1 人称単数 P に -ɣəm（反転動詞[7]の場合のみ）, 2 人称単数 P に -ɣi/-ɣe, 3 人称 P に -Ø（単数）, -t（双数）, -w（複数）が定形動詞固有の人称標識とは別に用いられている。なぜ非定形形式にこれらの人称接辞が部分的に混入しているのか, なぜ 1 人称・2 人称の双数・複数では用いられないのかは不明である。

２．２．コピュラ動詞

コピュラ文は, コピュラ動詞によって表わすことも可能である。その際, 用いられるのは,「～である」の意味を表わす動詞 it と存在動詞 tva である。チュクチ語について Dunn (1999) では前者の it のみがコピュラ動詞として挙げられている。コピュラ動詞を取る場合, 述語名詞は様態格を取って副詞的に表わされる[8][9]。このような述語名詞の表わし方は, Stassen (2003) によれば, Nominal-Locational Switching の例である[10][11]。次の (22)(23)(24) は,

---

[7] 反転動詞以外では, ine-/ena-という接頭辞で 1 人称単数の P が標示される。

[8] -u は様態格も絶対格複数も表わすため, そのどちらかが判断できない次のような文も見られる。

jeppə　qujecɣel-u　k-el-la-ŋ-Ø.
yet　newly.trained.reindeer-ESS?ABS.PL?　IPF-be-PL-IPF-3S
「それらは調教したてのトナカイである」

[9] 述語名詞が, 様態格を取って副詞的に表される例は, フィンランド語でも報告されている。ちなみに, フィンランド語で様態格が用いられるのは, 職業あるいは人生のある段階を表わす名詞, 言い換えれば, 一時的な役割や職業を意味する場合であるという (Stassen 2003)。

(a) Hän　oli　siellä　opettaja-na
he　be.3SG.PAST　there　teacher-ESS
'He was a teacher/he worked there as a teacher.'　(Lehtinen 1963:373)

Stassen (2003) によれば, フィンランド語にはこれに対して述語名詞が主格で表される次の文もあり, これら 2 種類の形式は時間的安定性 (Time Stability) によって対立しているという。

(b) Ystävä-ni　on　pappi
friend-my　be.3SG.PRES　vicar.NOM
'My friend is a vicar.'　(Fromm and Sadeniemi 1956:115)

[10] ちなみに, Stassen (2003) は, チュクチ語の「A が B にある」を意味する場所述語文が通常 it, tva あるいは,「座る」を意味する val' などの動詞をともなって形成されるとしているが, コピュラ文については言及していない。

[11] この他, 例外的に述語名詞が数量を表わす場合, 絶対格が出る例がテキストで見られたが, インフォーマントによればあまり自然ではないとのことであったため, 本稿では扱わない。

it でも tva でも表すことができる。

(22) jeppə ʕojacek-o t-ə-k-it-ə-ŋ / t-ə-ko-tva-ə-ŋ.
still young.guy-ESS 1SG.S-E-IPF-be-E-IPF 1SG.S-E-IPF-exist-E-IPF
「私はまだ若者だ」

(23) ənno ɣ-il-lin / ɣa-tva-len catkajoŋ-ʕojamtavelʕ-o.
3SG.ABS RES-be-3SG.S RES-exist-3SG.S think-man-ESS
「彼は思慮深い人だった」

(24) ŋelvəlʕ-ə-k ɣəjtapəcʕ-u k-it-ə-ŋ-Ø / ko-tva-ŋ-Ø
reindeer.herd-E-LOC head-ESS IPF-be-E-IPF-3SG.S IPF-exist-IPF-3SG.S
ɣərɣol'kavaw-Ø.
Gurgol'kavaw-ABS.SG
「グルゴリカヴァウはトナカイの群れの長だ」

以下では，まず，it, tva のそれぞれがどのような用法を持つのかを概観する。

２．２．１．it の用法

it は，「～である」という意味を表わす。通常の動詞同様，S の人称・数，アスペクト，時制により語形変化する (25)(26)(27)(28)。

(25) ŋeveq a-np-ə-ka əcajaqav-u, n-ə-pɣ-ə-ʕaw cawat-Ø
if not-put-E-not weight-ABS.PL PRP-E-light-E-ADV lasso-ABS.SG
k-it-ə-ŋ-Ø.
IPF-be-E-IPF-3SG.S
「もし錘を置かなければ，投げ輪は軽い状態だ」

(26) ajŋon miŋkəje mucɣine-w əllʕ-o k-el-la-ŋ-Ø, ʕopta
in.the.past how our-ABS.PL mother-ABS.PL IPF-be-PL-IPF-3S also
muju ən'ŋəʕan.
1PL.ABS in.this.way.
「私たちは，昔，私たちの母たちがそうだったようにしていた」

(a) kəlaw-wiŋ-ə-n amu mənɣətken kilometro-w k-el-la-ŋ-Ø.
run-NML-E-ABS.SG probably ten kilometer-ABS.PL IPF-be-PL-IPF-3S
「走る速度はおそらく 10 キロだ」

(b) tite muju omqət-ɣəpəŋ mət-ko-ɣala-la-ŋ mašina-ta, ən-in
when 1PL.ABS bridge-PRL 1PL.S-IPF-pass-PL-IPF car-INS his
jəq-ɣiŋ-ə-n ŋəjaq mənɣət-o va-cce-Ø.
fast-NML-E-ABS.SG four ten-ABS.PL be-PF-3SG.S
「私たちが橋を渡っていた時，速度は 40 キロだった」

(27) ekilu em-ə-ŋvo-k ɣawən-nəme-ma, ʕatkeŋ j-it-ə-ŋ-Ø
if only-E-begin-LOC ASC-soup-ASC bad FUT-be-E-FUT-3SG.S
mətqil-Ø.
fat-ABS.SG
「もしスープと混ぜたら，脂肪はだめになってしまうだろう」

(28) javal ujŋe etʕu ʕətʕ-a e-ɣekeŋəlʕet-ke t-it-ə-k-Ø.
afterward not again dog-INS not-go.on.a.sled-not 1SG.S-be-E-1SG.S-PF
「その後，私は二度と犬橇では行かなかった」

次に it が，コピュラ文で様態格を受ける以外に，どのような語を受けるのかを見る。

２．２．１．１．動詞の否定形

it は自動詞の否定形を作るのに補助動詞として用いられる。動詞語幹は e-/a-..-ke/-ka という否定の接周辞を取り，定形動詞として屈折できないため，it が代わりに屈折を担う(29)(30)(31)。

(29) kəmiŋ-ə-n ujŋe a-valom-ka k-it-ə-ŋ-Ø
child-E-ABS.SG not not-listen-not IPF-be-E-IPF-3SG.S
vava-na-ŋ.
grandmother-AN.SG-DAT
「子供はおばあさんの言うことを聞かない」

(30) ajɣəve ujŋe a-jajt-ə-ka t-it-ə-k-Ø, məjew
yesterday not not-return.home-E-not 1SG.S-be-E-1SG.S-PF because
inʕe vutq-ə-tvi-j-Ø.
early dark-E-become-PF-3SG.S
「昨日，私は家に帰らなかった，なぜならば，早く暗くなってしまったからだ」

(31) apappo-nte məjew n-ə-mel-qinet, ujŋe tite e-tkəŋewcit-ke
grandfather-ABS.DU because PRP-E-good-3DU not when not-fight-not
k-in-ŋ-i.
IPF-be-IPF-3DU.S
「祖父母はいい人たちなので，一度も喧嘩することはない」

２．２．１．２．副詞句

it は副詞を受けて，「そのような状態である」という意味を表す。

(32) miŋkəje en’pici-w k-el-la-ŋ-Ø, ən’ŋəʕan kəmiŋ-u.
how father-ABS.PL IPF-be-PL-IPF-3S in.such.way child-ABS.PL
「父親たちがどのようであれば，子供たちはそのようである（子供たちは父親たちのやり方をまねる）」

(33) en’pic-Ø mitiw inʕe j-it-ə-ŋ-Ø.
father-ABS.SG tomorrow early FUT-be-E-FUT-3SG.S
「父は明日早く来るだろう」

(34) ŋeveq a-np-ə-ka əcajaqav-u, n-ə-pɣ-ə-ʕaw cawat-Ø
if not-put-E-not weight-ABS.PL PRP-E-light-E-ADV lasso-ABS.SG
k-it-ə-ŋ-Ø.
IPF-be-E-IPF-3SG.S
「もし錘を装着しなければ，投げ輪は軽くなってしまう。」=(25)

(35) ənp-ə-janv-o k-ew-ŋəvo-la-ŋ-Ø, ‘pəce inet
old-E-person-ABS.PL IPF-say-HAB-PL-IPF-3S for.the.moment should.not
etun alvaŋ j-el-la-ŋ-Ø’.[12]
suddenly incorrectly FUT-be-PL-FUT-3S
老人たちは言う，「まだ食べたらだめだ。そうでないと（ベニテングダケ）は変なことになってしまう」

(36) ənnen-n’a-k ŋajen jaja-ŋa n-ə-mejŋ-ə-ʕew k-it-ə-ŋ-Ø.
this-house-LOC that(ABS) house-ABS.SG PRP-E-big-E-ADV IPF-be-E-IPF-3SG.S
「あの家はこの家より大きい」

(37) tite=ŋən jonat-ɣiŋ-ə-n n-ə-mel-ʕew j-it-ə-ŋ-Ø.
someday live-NML-E-ABS.SG PRP-E-good-ADV FUT-be-E-FUT-3SG.S
「いつか生活はよくなるだろう」

２．２．１．３．道具格名詞

it は，道具格名詞を受け，その名詞に関連する動作をおこなう意味を表す。

(38) ajŋon məjew ujŋe melɣətanŋ-ə-plak-o,
in.the.past because not russian-E-boot-ABS.PL
emʕuqun tanujɣ-ə-plak-a mət-k-en-ŋəvo-la-ŋ.
so seal.skin-E-boot-INS 1PL.S-IPF-be-HAB-PL-IPF
「昔はロシア製のブーツはなかった。だから，私たちはアザラシ皮のブーツを履いていた」

(39) aŋaŋ-ə-k ɣəmmo mitʕa-ʔ-icʕ-a t-it-ə-k-Ø.
festival-E-LOC 1SG.ABS beautiful-E-fur.coat-INS 1SG.S-be-E-1SG.S-PF
「祭りで私はきれいな毛皮コートを着た」

(40) wujv-ə-ŋ təle-k, mejŋ-ə-mašina-ta t-ə-j-it-ə-ŋ.
town-E-DAT go-LOC big-E-car-INS 1SG.S-E-FUT-be-E-FUT
「私は町に行くときには，大きな車で行くだろう」

---

[12] 覚醒作用のあるベニテングダケの正しい使い方を，老人が若者に説明している場面での発話。

(41)　ajŋon　janot　jəʕe-jujitkulʕe-te　k-en-ŋəvo-la-ŋ-Ø.
in.the.past　at.first　simply-lariat-INS　IPF-be-HAB-PL-IPF-3S
「昔はただ投げ輪で捕まえていた」

２．２．１．４．動詞裸語幹＋道具格

it は，裸の動詞語幹に道具格がついた形式を受け，その動詞の表わす動作をおこなうことを示す[13]。

(42)　qən’ʕutku-ta　t-ə-k-it-ə-ŋ.
cast.fishline-INS　1SG.S-E-IPF-be-E-IPF
「私は釣り糸を投げる（方法で釣りをする）」
(43)　təle-mejŋ-et-e　t-it-ə-k-Ø.
go-big-VBL-INS　1SG.S-be-E-1SG.S-PF
「私は少しずつ成長した」

２．２．１．５．存在

it が存在を表す例も，少ないが認められる。この場合，名詞は絶対格を取る。存在動詞 tva と言い換えることが可能である。

(44)　qonpəŋ　va-kkə　ŋelvəlʕ-ə-k,　ʕətʕ-u　k-el-la-ŋ-Ø/
always　exist-LOC　herd-E-LOC　dog-ABS.PL　IPF-be-PL-IPF-3S
ko-tva-la-ŋ-Ø　ŋəcceq　waca　ŋəjoq.
IPF-exist-PL-IPF-3S　two　sometimes　three
「いつも群れにいる時には，犬は 2 匹か 3 匹いる」
(45)　ajɣove　jatan　ənnen　it-ti-Ø/　va-cce-Ø　n’acɣ-ajmak-Ø.
recently　only　one　be-PF-3SG.S　exist-PF-3SG.S　fur.skin-wrapping-ABS.SG
「最近では，1 つしかニャチガイマクがなかった」

ただし，次の (46)(47)(48) では it は存在動詞に置き換えることができない。これらは，(44)(45) と異なり，存在というよりは，「（映画が）上映される」「（会議が）開かれる」「（装甲車が）行く」を言い換えた代動詞的な機能を担っているためであると考えられる。

(46)　mitiw　j-it-ə-ŋ-Ø　mitʕajin-Ø　kino-Ø.
tomorrow　FUT-be-E-FUT-3SG.S　beautiful-ABS.SG　movie-ABS.SG
「明日は美しい映画があるだろう」

---

[13] コリャーク語では，(18) や (21) の共同格の例以外にも動詞の裸語幹に様々な格接辞がつくことにより，副詞節を形成することができる（呉人 2016）。

(47) ecɣi k-it-ə-ŋ-Ø omakat-ɣiŋ-ə-n cowqoc-ə-k.
now IPF-be-E-IPF-3SG.S get.gather-NML-E-ABS.SG sovkhoz-E-K
「今日はソフホーズで集会がある」

(48) wutqen ɣ-il-lin ŋalvəlʔ-etəŋ traktor-Ø.
today RES-be-3SG.S reindeer.herd-ALL tractor-ABS.SG
「今日，トナカイの群れに向かってトラクターが行った」

２．２．２．tva の用法

tva は主に物や人の存在を表わす。通常は，it と言い換えることはできない。

(49) ɣəmnin əlla-Ø am-ja-ciko ko-tva-ŋ-Ø/
my mother-ABS.SG only-house-inside IPF-exist-IPF-3SG.S
*k-it-ə-ŋ-Ø.
IPF-be-E-IPF-3SG.S
「私の母は家に一人きりでいる」

(50) wujv-ə-k ott-ə-ja-w ko-tva-la-ŋ-Ø /
village-E-LOC wood-E-house-ABS.PL IPF-exist-PL-IPF-3S
*k-el-la-ŋ-Ø to velitko-ja-n.
IPF-be-PL-IPF-3S and trade-house-ABS.SG
「村には何軒かの木造の家と1軒の店がある」

(51) velitko-ja-k qonpəŋ əməŋ jinnə ko-tva-ŋ-Ø/
buy-house-LOC always all what(ABS.SG) IPF-exist-IPF-3SG.S
*k-it-ə-ŋ-Ø ŋənvəq.
IPF-be-E-IPF-3S many
「店にはいつもなんでもたくさんある」

３．人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチング

本節では，人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチングの条件を探る。コリャーク語の 2 つの形式によるコピュラ文は，Stassen (2003) のいう，述語名詞が名詞的にも副詞的にも表わされる ‘Nominal N-L Switching’ タイプの一例である。それでは，このようなスイッチングはいかなる条件によって起こるのかが，次に問題となる。Stassen (2003:215) は，このようなスイッチングの条件を，「永続性パラメータ (Permanency Parameter)」によるものとし，名詞的に表わされる場合には「本質 (essence)」，副詞的に表わされる場合には「偶発性 (contingence)」という意味的対立があるとする。すなわち，前者においては，固有で永続的かつ不変的な特徴が表わされるのに対し，後者においては限定的な時間内でのある種の役割，機能が表わされるという。そのため，たとえば，「牧師」「教師」「コミュニスト」などは，「犬」「人」「石」「家」といった不変的で固有の事物を表す語よりもこのようなスイッチングを起こしやすいというのである。その一例として，Stassen (2003:217) は，現代アイルランド語の次のような例を挙げている。(52) はコピュラを介して主語と述語名

詞が結びついて，「本質」を表わす文であるのに対し，(53) は述語名詞が副詞的に表されて，「偶発性」を表わす文であるという。(53) では，時間副詞 anois「今」が用いられていることに注目されたい。

(52) Is　múinteoir　é
COP　teacher　he
'He is a teacher.'　(Greene 1966:43)

(53) Tá　sé　ina　mmúinteoir　anois.
be.PRES　he　in-his　teacher　now
'He is a teacher now.'　(Greene 1966:44)

一方，次のタミール語の例は，「本質」「偶発性」の違いによりゼロ・コピュラ (54) と副詞 (55) でスイッチングしている例であるとされる。

(54) Avaru　(oru)　daktar
he　(one)　doctor
'He is a doctor.'　(Asher 1982:49)

(55) Ippo　oru　daktar-aa　taan　irukkaraaru
now　one　doctor-ADV　EMPH　be.3SG.HON.PRES
'Now he is a doctor.'　(Asher 1982:50)

そこで，以下では，コリャーク語の人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチングにおいても，Stassen (2003) のいう「永続性パラメータ (Permanency Parameter)」による「本質」と「偶発性」に相当する対立があるのかどうかを，主に次の 4 つの角度から検証する。

① 人称コピュラとコピュラ動詞の分布はどうなっているのか。
② テンス・アスペクトといった時間にかかわるカテゴリーは両者においてどのように標示されているのか，あるいはいないのか。
③ 時間副詞は両者においてどのように用いられているのか。
④ 述語名詞の意味とコピュラ形式の選択にはなんらかの相関性があるのか。

３．１．人称コピュラとコピュラ動詞の分布

人称コピュラとコピュラ動詞の分布について，調査で明らかになったのは次の 4 点である。

(A) 人称コピュラは基本的にどのような述語名詞とも共起できる。
(B) コピュラ動詞としか共起できない述語名詞はない。
(C) 人称コピュラともコピュラ動詞とも共起できる述語名詞がある。
(D) 人称コピュラとしか共起できない述語名詞がある。

(A)(B) から，2 つのコピュラ形式のうち，人称コピュラが無標の形式，コピュラ動詞が有標の形式であることがうかがえる。言い換えれば，コピュラ動詞は，人称コピュラでは表せない意味・機能を付加するために用いられ，場合によって両者は (C) のようにスイッチングを起こす。(D) については，聞き取り調査ではコピュラ動詞とは共起できないとされた述語名詞が複数認められているが，異なる文脈を与えることによって共起できるようになる可能性も想定されるため，検討が必要である。

３．２．時間カテゴリーの標示の有無

人称コピュラではテンス・アスペクトの標示がなされないのに対し，コピュラ動詞ではテンス・アスペクトの標示がなされる。次の人称コピュラ (56a)(57a) とコピュラ動詞 (56b)(57b) のペアを見られたい。

(56a) ɣəmmo jejɣcewŋəlʕ-iɣəm.
1SG.ABS student-1SG.S
「私は学生だ」

(56b) ɣəmmo jejɣcewŋəlʕ-u t-ə-k-it-ə-ŋ/ t-it-ə-k-Ø/
1SG.ABS student-ESS 1SG.S-E-IPF-be-E-IPF 1SG.S-be-E-1SG.S-PF
t-ə-j-it-ə-ŋ.
1SG.S-E-FUT-be-E-FUT
「私は学生だ／だった／になるだろう」

(57a) ənno ɣəmnin el’ʕa-tomɣ-ə-n.
3SG.ABS my woman-friend-E-3SG.S
「彼女は私の女友達だ」

(57b) ənno el’ʕa-tomɣ-o k-it-ə-ŋ-Ø/ it-ti-Ø/
3SG.ABS woman-friend-ESS IPF-be-E-IPF-3SG.S be-E-PF-3SG.S
j-it-ə-ŋ-Ø ɣəmk-ə-ŋ.
FUT-be-E-FUT-3SG.S 1SG-E-DAT
「彼女は私にとって女友達だ／だった／になるだろう」

言い換えれば，(56a)(57a) の述語名詞は，時間的な制約を受けない対象として表わされるのに対し，(56b)(57b) の述語名詞は，時間の流れの中で動的に捉えられた対象であるといえる。時間カテゴリーの標示の有無から見ると，Stassen (2003) のいう「永続性パラメータ」がコリャーク語の人称コピュラとコピュラ動詞についてもあてはまるといえそうである。

３．３．時間副詞との共起

ところが，時間副詞との共起性について見ると，これら 2 つの形式のコピュラ文の異なる側面が見えてくる。Stassen (2003) の「永続性パラメータ」に従うならば，人称コピュラは，一時的な意味を表わす時間副詞との共起が許容されないことが想定されるが，実際には，コピュラ動詞同様に，ecɣi「今」，oʕatəŋ「一時的に」，jeppə「まだ」，ŋəjoq ɣiviw「3

年間」，ʕəlo「日中」，vutqətvik「夜間」，wuccin ɣivik「今年」などの時間副詞句とも共起できる。以下の例では，(a) は人称コピュラ文，(b) はコピュラ動詞文である。さしあたり，意味の細かなニュアンスの違いはさておき，両者には便宜的に一つの訳を付すものとする。

(58a) ɣəmmo　oʕatəŋ　winn’etəlʕ-eɣəm　ənk-ə-ŋ.
1SG.ABS　temporarily　assistant-1SG.S　3SG-E-DAT
(58b) ɣəmmo　oʕatəŋ　wenn’etəlʕ-o　ənk-ə-ŋ　t-ə-k-it-ə-ŋ.
1SG.ABS　temporarily　assistant-ESS　3SG-E-DAT　1SG.S-E-IPF-be-E-IPF
「私は一時的に彼／彼女の助手だ」
(59a) ənno　ecɣi　in’el’əclʕ-ə-n.
3SG.ABS　now　brigadier-E-3SG.S
(59b) ənno　ecɣi　in’el’əclʕ-u　k-it-ə-ŋ-Ø.
3SG.ABS　now　brigadier-ESS　IPF-be-E-IPF-3SG.S
「彼／彼女は今，ブリガード長だ」
(60a) ɣəmmo　jeppə　jejɣucewŋəlʕ-eɣəm.
1SG.ABS　still　student-1SG.S
(60b) ɣəmmo　jeppə　jejɣucewŋəlʕ-u　t-ə-k-it-ə-ŋ.
1SG.ABS　still　student-ESS　1SG.S-E-IPF-be-E-IPF
「私はまだ学生だ」
(61a) ʕəlo　ənno　ajəm-Ø　kale-ja-k,
in.the.daytime　1SG.ABS　boss-3SG.S　write-house-LOC
vutq-ə-tvi-k　jəjulʕ-ə-n　kəlub-ə-k.
darkness-E-become-LOC　night.watchman-E-3SG.S　club-E-LOC
(61b) ʕəlo　ənno　k-it-ə-ŋ-Ø　ajəm-u　kale-ja-k,
in.the.daytime　1SG.ABS　IPF-be-E-IPF-3SG.S　boss- ESS　write-house-LOC
vutq-ə-tvi-k　jəjulʕ-u　kəlub-ə-k.
darkness-E-become-LOC　night.watchman-ESS　club-E-LOC
「彼／彼女は日中は学校の校長で，夜は集会所の宿直だ」

ただし，人称コピュラは，コピュラ動詞と異なり，発話時点以前あるいは以降を表わす時間副詞とは共起できない。すなわち，述語名詞の表わす対象は，発話時点を含む時間の流れの中で成立しているものに限られる。(62a)(63a) の人称コピュラの非文の例と，(62b)(63b) のコピュラ動詞の適格文の例を見られたい。

(62a) *janot　ənno　qacɣ-ə-va-lʕ-ə-n　pencija-lʕ-ə-n.
in.the.past　3SG.ABS　poor-E-be-PART-E-3SG.S　pension-PART-E-3SG.S
(62b) janot　ənno　qacɣ-ə-va-lʕ-o　pencija-lʕ-o　k-it-ə-ŋ-Ø.
in.the.past　3SG.ABS　poor-E-be-PART-ESS　pension-PART-ESS　IPF-be-E-IPF-3SG.S
「彼／彼女は昔，貧しい年金生活者だった」

(63a) *qulin ɣivi-k ɣəmmo jejɣucewŋəlʕ-iɣəm.
other year-LOC 1SG.ABS student-1SG.S
(63b) qulin ɣivi-k ɣəmmo jejɣucewŋəlʕ-u t-ə-j-it-ə-ŋ.
other year-LOC 1SG.ABS student-ESS 1SG.S-E-FUT-be-E-FUT
「来年，私は学生だろう」

これまで見てきた時間カテゴリーの標示の有無と時間副詞との共起の可否についてまとめると，次の表 2 のようになる。

［表２］時間カテゴリーの標示と時間副詞との共起

	時間カテゴリー	時間副詞	
人称コピュラ	×	発話時点	○
		以前	×
		以降	×
コピュラ動詞	○	発話時点	○
		以前	○
		以降	○

すなわち，人称コピュラはその構造上，時間カテゴリーを標示することはできないが，対象が発話時点に成立する役割・機能に限って，これを時間副詞によって補完的に表わすことが可能だということになる。

さらに，上の (58)~(61) の例からもうかがえるように，人称コピュラ，コピュラ動詞いずれにおいても，発話時点を含意する時間副詞と共起できるのは，職業や身分など，限られた時間のスパンの中で付与されている役割や機能を表わす述語名詞に限られる。すなわち，時間副詞と共起できるか否かは，述語名詞の意味によるものであり，コピュラの種類によるものではない。この点で，コリャーク語の場合には，名詞的コード化か副詞的コード化かという形式的な対立が「本質」か「偶発性」かという意味的な対立に対応するとする Stassen (2003) の見解とは合致しないことがわかる。

３．４．コピュラ動詞の対比機能

これまでの筆者の調査では，「人間」「石」「木」といった不変的な属性を持つ事物を表わす名詞，「ロシア」「中国」と言った国名などは (64a)(65a) のように人称コピュラでは表わされるが，コピュラ動詞では表わされないとされた (64b)(65b)。これらは，Stassen (2003:215) が名詞的にコード化されるとする，固有で永続性のある ‘ontological’ な対象であるといえ，この結果は Stassen (2003) の見解を支持しているとも考えられる。

(64a) ɣəmmo ʕujemtewilʕ-iɣəm.
1SG.ABS man-1SG.S
(64b) *ɣəmmo ʕujemtewilʕ-u t-ə-k-it-ə-ŋ.
1SG.ABS man-ESS 1SG.S-E-IPF-be-E-IPF

「私は人間だ」

(65a) wuccin　wəwwəlŋ-ə-n.
this　stone-E-3SG.S

(65b) *wuccin　wəwwəlŋ-u　k-it-ə-ŋ-Ø.
this　stone-ESS　IPF-be-E-IPF-3SG.S
「これは石だ」

しかしながら，これらの述語名詞も対比的な文脈を与えられれば，コピュラ動詞とも共起できる可能性がある。たとえば，国名ではないが，民族名としての「コリャーク」は次のようにロシア人との対比的な文脈では，コピュラ動詞と共起することが可能である。

(66) A: meki-ɣi　ɣəcci?
who-2SG.S　2SG.ABS
「あなたは誰ですか？」

B: ɣəmmo　jətek-iɣəm.　ɣəmmo　cawcəvalʕ-eɣəm.
1SG.ABS　Jutek-1SG.S　1SG.ABS　Koryak-1SG.S
「私はジュテクといいます。私はコリャークです」

A: elvelʕ-iɣi　cawcəvalʕ-eɣe.　ɣəcci
not.that-2SG.S　reindeer.herder-2SG.S　2SG.ABS
ko-melɣətanŋ-ə-peja-ŋ-Ø
IPF-russian-E-look.like-IPF-2SG.S
「あなたはコリャークではない。あなたはロシア人に似ています」

B: ujŋe,　ɣəmmo　qejl'a　cawcəvalʕ-u　t-ə-k-it-ə-ŋ.
no　1SG.ABS　really　reindeer.herder-ESS　1SG.S-E-IPF-be-E-IPF
「いいえ，私は本当にコリャークなのです」

次の (67) は，魚名をめぐる会話の例である。この場合にも対比的な文脈でコピュラ動詞が現れることに注意されたい。

(67) A: Wuccin　jeq-ənnəʔən?
this(ABS)　what-fish(3SG.S)
「これはなんという魚ですか？」

B: ənnin　qetaqet.
this(ABS)　salmon(3SG.S)
「これはサケです」

A: ʕam　wuccin　jeq-ənnəʔən　əppl'u-jəkiŋ-ə-lʕ-ə-n?
well.then　this(ABS)　what-fish(3SG.S)　small-mouth-E-PART-E-3SG.S
「では，この口の小さいのはなんという魚ですか？」

B: ʕam ənnin kəcav-o k-it-ə-ŋ-Ø.
well.then this(ABS) grayling-ESS IPF-be-E-IPF-3SG.S
「ええと，こっちはカワヒメマスです」

以上から，ニュートラルな文脈では人称コピュラとしか共起しえない固有の事物を表わす述語名詞であっても，対比的な文脈が与えられれば，コピュラ動詞との共起が可能になることが予想される。

４．おわりに

以上，本稿では，コリャーク語のコピュラ文を形成する人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチングについて，Stassen (2003) の提案した「永続性パラメータ」と照らし合わせながら考察を加えた。その結果，人称コピュラならびにコピュラ動詞について，以下のことが明らかになった。

1) **人称コピュラ**は無標であり，基本的にどのような述語名詞とも共起できる。構造上，時間の文法カテゴリーが標示されないことから，時間的な制約のない固定した対象として述語名詞をとらえ描写する際に用いられる。ただし，一時的な役割や機能を表わす述語名詞の場合には，発話時点を含意する時間副詞に限って共起が可能である。
2) **コピュラ動詞**は，テンス・アスペクトといった時間カテゴリーや，発話時点かその前後かにかかわらない時間副詞とも共起可能で，時間の流れの中で対象を動的にとらえる際に使われるといえる。基本的には一時的な役割や機能を表わす述語名詞と共起しやすいことからも，このことはうかがえる。ただし，固有かつ不変的な事物を表わす名詞であっても，対比的な文脈が与えられれば，コピュラ動詞の補語になりうる。

以上の結果はまた，Stassen (2003) の提案する「永続性パラメータ」が再検討の余地があることを示していると考えられる。もし，人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチングが，単に一時的か永続的かというような客観的な時間の長短によるものであるとするならば，上述のように人称コピュラが時間副詞と共起したり，固有かつ不変的な事物を表わす名詞が文脈によりコピュラ動詞の補語になったりすることは起こりえないはずである。両者の使い分けには，むしろ，対象を固定的にとらえるか動的にとらえるかという話者の視点が大きく関与していると考えられる。また，このように考えることにより，客観的な時間の長短では説明できないこれらの事実も矛盾なく説明できるように思われる。

加えて，以上の考察から，コリャーク語では Event, Property, Class, Locational のすべての意味クラスにわたって，スイッチングが起きていることが明らかになった。動詞的コード化が典型的である Event については，(21) であげた共同格接周辞の前半部分 ɣe-/ɣa- が動詞の裸語幹につく結果相が，定形動詞の完了相と対立している。(68) ではスラッシュの前が結果相，後ろが完了相である。

(68) kəmiŋ-ə-n　ɣa-ŋto-len　/　ŋəto-j-Ø　jaja-ŋqo.
child-E-ABS.SG　RES-go.out-3SG.S　go.out-PF-3SG.S　house-ABL
「子供が家から出てきた」

命令を表わす際にも，定形動詞の2人称の希求法とは別に，共同格接周辞 (ɣe-/ɣa-...-te/-ta/-e/-a) に動詞の裸語幹がついた形式が用いられる。(69) は，スラッシュの前が共同格接周辞，後ろが定形動詞によって命令の意味が表わされている例である。

(69) kitkit　it-ə-k　picɣ-ə-ŋ,　jaqam　ɣe-lqət-e　/
as.soon.as　run.short.of-E-LOC　food-E-DAT　immediately　COM-go-E-COM
q-ə-lqət　anotvanv-etəŋ.
2SG.S.OPT-E-go　spring.camp-ALL
「食料が足りなくなったらすぐに，春営地に行きなさい」

Property については，(20) であげた人称コピュラによるコピュラ文と同じ人称接辞を取る「性質形容詞」の形式と，対応する動詞形式が共存する。両者は属性叙述か事象叙述かで対立する。(70) ではハイフンの前が性質形容詞，後ろが対応する動詞形式である。

(70) ənno　unmək　n-ə-ŋot-qen　/　ko-ŋot-at-ə-ŋ-Ø
3SG.S　very.much　PRP-E-angry-3SG.TOP　IPF-angry-VBL-E-IPF-3SG.S
「彼／彼女はとても怒りっぽい／怒っている」

Locational については, 存在動詞 tva による動詞述語文 (71a) と分詞形によるコピュラ文 (71b) が共存する。

(71a) ɣəmnin　ŋənvəq　qoja-w　ko-tva-la-ŋ-Ø.
my　many　reindeer-ABS.PL　IPF-exist-PL-IPF-3S
「私にはたくさんのトナカイがいる」
(71b) ɣəmmo　mək-qoja-lʕ-eɣəm.
1SG.S　many-reindeer-PART-1SG.S
「私はたくさんのトナカイ持ちだ」

このように，名詞的コード化と動詞的コード化のスイッチングが述語文全体にわたって見られることが，コリャーク語のどのような性格を反映したものなのか，また，このようなスイッチングはどのようなパラメータにより起きるのかの解明は，次の課題である。以上，今後の述語文の類型論的な考察に向けて，まずはコピュラ文の 2 つの形式の整理をおこなった次第である。

【略語表】

A=agent-like argument	ABL = ablative	ABS = absolutive
ADV=adverb	ALL=allative	ASC=associative
CAUS=causative	COM=comitative	COP=copula
DAT=dative	DIM=diminutive	DU=dual
E=epenthetic	EMPH=emphatic-marker	ERG=ergative
ESS=essive	FUT=future	HAB=habitual
HON=honorific form	INF=infinitive	INS=instrumental
INV=inverse	IPF=imperfective	LOC=locative
NML=nominalizer	OPT=optative	P=patient-like P-argument
PART=participle	PF=perfective	PL=plural
POSS=possessive	PRES=present tense	PRL=prolative
PRP=property predication	REL=relational	RES=resultative
S=single argument	SG=singular	TOP=topic
VBL=verbalizer		

【参考文献】

呉人惠 (2010)「コリャーク語の属性叙述―主題化のメカニズムを中心に」『言語研究』138:115-147.

呉人惠 (2016)「コリャーク語の副詞節 : 名詞化タイプと非名詞化タイプ」『北方言語研究』6:1-23.

Asher, R. E. (1982) *Tamil*. Amsterdam: North-Holland.

Bogoras, Waldemar (1922) *Chukchee.* In F. Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages.* Part 2, *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 40: 631-903. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

Dunn, Michael John (1999) *A Grammar of Chukchi*. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of Australian National University.

Fromm, Hans and Sadeniemi, Matti (1956) *Finnisches Elementarbuch, i. Grammatik.* Heidelberg: Winter.

Greene, David (1966) *The Irish Language*. Dublin: The Three Candles.

Kurebito, Megumi (2018) Property Predication viewed from Japanese. In Shibatani, Masayoshi and Kageyama, Taro (eds.) *Handbooks of Japanese Language and Linguistics.* 677-695. Berlin: de Gruyter Mouton.

Kurebito, Megumi (ed.)(2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.

Kurebito, Megumi (ed.)(2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.

Lehtinen, Meri (1963) *Basic Course in Finnish*. Bloomington: Indiana University Press.

Stassen, Leon (2003) *Intransitive Predication.* Oxford: Oxford University Press.

Zhukova, Alevtina Nikodimovna. (1972) *Grammatika korjakskogo jazyka.* Leningrad: Izdatel'stvo Nauka

Switching between Personal Copulas and Copula Verbs in Koryak

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

Koryak copula sentences are formed by either personal copulas, which are derived from independent personal pronouns, or the copula verbs *it* ‘be’ or *tva* ‘exist’ with the predicate nominal marked in the essive case. The present paper examines the conditionality of the switch between the two types of copulas. According to Stassen (2003), this is a type of nominal and locational switching and can be interpreted as a case of ‘Permanency Parameter’, which induces an opposition between ‘essence’ and contingence. However, in Koryak, even the personal copula, which is not expected to co-occur with temporal adverbs such as ‘now’, ‘temporarily’, ‘yet’, ‘for three years’, and ‘in this year’, can co-occur with such adverbs. Furthermore, predicate nominals that refer to the subject of inherent and unchangeable character can coexist with the copula verb, in some contrastive context such as ‘not A but B’. The present examination reveals that, judging from these facts, the switch is conditioned by how the subject is perceived by the speaker rather than by the physical duration of the subject.

Through this examination, this paper also demonstrates that Koryak shows idiosyncrasy in that it exhibits switching in all semantic classes, including ‘Event’, ‘Property’, ‘Class’, and ‘Locational’. Clarification of the factors behind this idiosyncrasy remains to be sought through future research.

（くれびと・めぐみ　kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp）